

主題：性別の違いによるボランティア活動の成果**－副題：大学生のアンケート調査から－**

○ 秋田看護福祉大学 白男川 尚 (会員番号 8317)

赤羽 卓朗 (秋田看護福祉大学 会員番号 8115)

吉田 守実 (秋田看護福祉大学 会員番号 7459)

熊谷 大輔 (秋田看護福祉大学 会員番号 8332)

キーワード：東日本大震災、ボランティア活動成果、大学生

1. 研究目的

2011年3月11日に東日本大震災が発生し、全国各地から多くのボランティアが現地で様々な復興支援に向けて活動を行い、多くの大学で、現地の復興に向けた様々な支援が行われ教育への効果が報告されている。一方、大学生のボランティア活動の研究では、男女での違いについて有意差があることが報告されている。

本研究の目的は、性別による違いがボランティア活動の成果に与える影響を明らかにすることを目的としておこなう。

2. 研究の視点および方法**【調査の対象】**

本調査の対象者は、A大学 看護学科・福祉学科のボランティア参加学生1～4年生58名である。

【調査の方法】

無記名による自記式質問紙調査を、ボランティア実施前・後に実施した。アンケートは、58名中、44名の回答を得た（回収率75.8%）。

【調査期間】

調査実施時間は、平成25年10月6日～10月17日であった。

【調査項目】

調査項目は、基本的属性である、「学年」、「性別」、ボランティア活動の成果については、妹尾（2003）らが用いた「あなた自身のボランティア活動の成果について」（16項目）を用いた。

【分析方法】

分析では、単純集計結果をみたあとに、性別を独立変数、「あなた自身のボランティア活動の成果について」（16項目）を従属変数として、一元配置分散分析にて行った。

3. 倫理的配慮

調査者に対しては、研究の目的、主旨・内容、方法を文書及び口頭で説明し、本人の権利の尊重と調査協力への任意性について保障をし、調査協力の拒否・辞退による不利益は一切生じなく、成績にも影響はせず、得られたデータは全て統計的に処理し、個人が特定されないよう、調査票は無記名で行った。また、本研究の調査は、秋田看護福祉大学 倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 研究結果

性別は、「男性」10人（24.4%）、「女性」31人（75.6%）であった。

学年は、「1年生」19人（43.2%）、「2年生」11人（25.0%）、「3年生」12人（27.3%）、「4年生」2人（4.5%）であった。

ボランティア活動の成果についての質問は16項目であり、平均は、1. 人や地域に対して貢献しようとする気持ちが生じた（2.79）、2. 日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった（2.02）、3. 自分にできることで社会と関わり人の役に立つことができた（2.20）、4. 対象者の幸福、安寧の為の新たな目標ができた（2.00）、5. 仲の良い友達が出来た（1.67）、6. 新しい出会いがあり人間関係が広がった（2.02）、7. 対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になった（2.58）、8. 「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた（2.37）、9. 気持ちの充実感が生まれた（2.39）、10. やり甲斐が生まれた（2.32）、11. 人に対する思いやる気持ちが意識づいた（2.39）、12. 活動を通して自分自身が成長できた（2.27）、13. 活動を通して喜びや感動を経験した（2.30）、14. 活動が生活の中で重要な部分となり自分のものになった（2.04）、15. 対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた（2.27）、16. 必要とされていることが実感でき自信につながった（1.93）であった。

一元配置分散分析の結果、「活動を通して、喜びや感動を経験した」で有意な関連が示された。

5. 考察

本研究の結果から、ボランティア活動の成果について、性別の違いは、女性では、活動を通して喜びや感動を経験したことによる充実感が影響していると考えられる。

引用文献・参考文献

- 1) 妹尾香織，高木修：援助行動経験が援助者自身に与える効果-地域で活動するボランティアに見られる援助成果，社会心理学研究，18（2），106-118，2003.
- 2) 一般社団法人公立大学協会，大阪府立大学：2011年度 東日本大震災復興学生ボランティア「大学生の参加経験に関するアンケート調査」報告書，1～32.